

【共同研究】

質問紙による空想傾向の測定 Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) の作成

岡田 斉*・松岡和生**・轟 知佳***

The Measurement of Fantasy Proneness. Construction of a Japanese Version of Creative Experience Questionnaire (CEQ-J).

Hitoshi OKADA, Kazuo MATSUOKA and Chika TODOROKI

The current article describes the psychometric qualities of a Japanese version of the Creative Experience Questionnaire (Merckelbach, Horselenberg, & Muris, 2001), a brief 25 item self-report questionnaire of fantasy proneness. A sample of normal undergraduate students ($n = 433$) completed CEQ-J and of the 233 completed Imaginative Involvement Inventory (Kasai & Inoue, 1993) and Dissociative Experiences Scale (DES-; Tanabe & Ogawa, 1992). Factor analysis and reliability analysis indicated that the CEQ-J had simple 3-factor structure and showed high reliability ($\alpha = 0.83$). Furthermore, there are substantial correlations between the CEQ-J and the III and the DES-, which supports the validity of the CEQ-J as well as original CEQ.

本論文の目的はMerckelbach, Horselenberg, & Muris (2001)のCreative Experience Questionnaireの日本語版(以下CEQ-Jと呼ぶ)作成にある。

空想傾向(Fantasy proneness)はWilson & Barber (1983)やLynn & Rhue (1988)らの研究に代表されるように、催眠の研究から知られてきた特性であり、その文脈で研究が進められてきた。ところが、最近これらの研究に加えて、記憶研究の流れにある目撃証言(e.g. Hyman & Billings, 1998)臨床心理学的研究の流れにある解離性人格障害の二つの観点からも着目されるようになってきた。特に後者

については催眠感受性の研究との関係性が深いことが知られている。Pekala, Angelini, & Kumar (2001)は空想傾向と解離との間の関連性について以下のようにまとめ、空想傾向は催眠感受性と関連し、解離を理解するうえでもおそらく重要な要因であろうと述べている。

Wilson & Barber (1983)は空想傾向の強い人はイメージや想像、ファンタジーの世界で生活する傾向が強く、事実とフィクションもしくは空想を混同する傾向がある。また、想像妊娠の経験や幻覚的な強度を持った記憶やイメージの生成なども経験することが多い。空想傾向の強い対象者の65%は「全ての感覚モダリティにおいて幻覚的な強度をもつ空想を経験することができ、また、85%は(対象

* おかだ ひとし 文教大学人間科学部臨床心理学科

** まつおか かずお 岩手大学人文社会科学部

*** とどろき ちか 岩手大学人文社会科学部

群が24%であったのに対して)彼らは空想したことの記憶と実際に体験したことの記憶を混同する傾向がある」と言っている。そして、Lynn, Rhue & Green (1988) 過去に強い空想傾向を有していた場合、後に解離性人格障害と診断される可能性は上がることを示唆し、「空想傾向が虐待やトラウマのエピソード以前から発達していたのか、その後に発達させたかについては定かではないが、過酷な子ども時代の環境が空想傾向と結びつくことによりその個人が後に多重人格と診断される可能性が増大するのであろう。」とも述べている。しかし、Lynn & Rhue (1991) は催眠感受性と空想傾向の関係についての研究から催眠感受性と空想傾向の間の相関はあってもわずかである ($r = 0.25$) と報告し、高い催眠感受性を持つ対象者の大多数は空想傾向であるということとはできないが、高い催眠感受性を持つ対象者は低い傾向の人と比較すればより高い空想傾向を持っているということを見出した、と論じている。

このように空想傾向と解離や解離性人格障害の間には関連性が認められることは確かなのであるが、その因果関係については議論が多いことがわかる。いずれにせよ、空想傾向はこれらの問題を検討する上できわめて重要な鍵となる概念であることは間違いないと思われる。

では、空想傾向の測定はどのようにして行われるのであろうか。面接によって知られるようになった現象であるが、その傾向を測定するための質問紙がいくつか開発され、用いられてきた。Merckelbachら(2001)は質問紙で空想傾向を測る方法をめぐる状況について以下のようにまとめている。

空想傾向の研究ではWilson & Barber (1981)によって作成されたInventory of Childhood Memories and Imaginings (ICMI)のいくつかのバージョンが使われること多かった。オリジナルの尺度は103項目からなるが、その短縮版のICMIが使われることもあった(e. g. Lynn & Rhue, 1988)。Merckelbach, Muris &

Rassin (1999)は健康な対象者において空想傾向と解離傾向の関連性を検討しようとしたが、ICMIの種類が雑多でまとめることが難しく、また、統計的な検討結果を見つけることができなかつたと述べている。彼らの知る限りではICMIについて統計的検討がなされた研究は唯一、Myers (1983)の48項目版のICMIだけであったという。しかし、MyersのICMIは子どもと青年に限られていた。また、他のICMIと同様にMyersの尺度は冗長であった。これらのことから、Merckelbachたちは空想傾向をより手短に測る質問紙を開発することを決意し、それをCreative Experience Questionnaire (CEQ)と名づけたのであった。この命名は必ずしも尺度を正確に現しているとはいいがたいが、あえて、「空想(fantasy)」という言葉の使用は避けた。この言葉は一部の対象者にとっては否定的な響きを持つと考えられたからである、と彼らは述べている。このようにしてMerckelbachら(1998, 2001)はこの質問紙を開発し、種々の要因との関連性について検討を進めてきた。

CEQは健常者の幻聴的な体験を説明する上で有効な尺度であることを彼らは示している。Merckelbach & Van de Ven (2001)はWhite Christmas testを健常な大学生に実施した。その結果、白色雑音の中に声が聞こえた被験者とそうでない被験者の間でイメージの鮮明性を測るQMI (Sheehan, 1967) 社会的望ましさを測るSDS (Crowne & Marlow, 1964) については有意差がなかったが、幻聴体験の程度を測定するLSHS (Launay & Slade, 1981) それにCEQでは有意な群間差が見られたと報告している。さらに、LSHSとCEQの間に0.56の相関係数が見られたが、後退ロジスティック重回帰分析の結果、CEQのみが有意になったと報告し、CEQで測定された空想傾向が白色雑音中での幻聴と関連するとしている。Van de Ven & Merckelbach (2003)はさらにWhite Christmas testとLSHS、Schizotypal Personality Scale (Claridge & Broks, 1984) イメージの鮮明性(QMI)の関連性について検

討を行い、幻覚体験を報告した対象者とそうでない対象者の間ではCEQとQMIでのみ有意差が見られたと報告している。さらにこれらの尺度は全てお互いに有意な相関を示したことから、これらの質問紙の得点を説明変数、幻覚体験の有無を目的変数とした後退ロジスティック重回帰分析を行った結果、CEQのみが有意な変数としての残ったと報告した。

また、解離傾向と空想傾向の関連性の検討にもCEQが用いられ、価値ある結果が得られている。Muris, Merckelbach, & Peeters (2003) は青年版のDES (A-DES) を作成し、種々の不安傾向と空想傾向との関連性について重回帰分析を用いて検討し、DESと空想傾向の間には強い関連性があることを報告している。また、Merckelbach, Horselrberg & Schmidt (2002) は健常な大学生を対象者として、解離傾向と空想傾向の関係を構造分析する目的で、DES, Cognitive Failure Questionnaire (Broadbent, Cooper, Fitzgerald, & Parkes, 1982), Childhood Trauma Questionnaire (Bernstein & Fink, 1998) とCEQを実施し、これらの尺度の間の相関を調べ、共分散構造分析を用いてモデル化を試みた。その結果、トラウマが解離を引き起こし、それが空想傾向や認知の失敗を引き起こすというこれまでに考えられてきたモデルには妥当性があつたが、これとは異なるモデルである、解離が空想傾向と認知的失敗を引き起こし、それがトラウマの報告を引き起こすというモデルはより適合性が高いという結果を得た。この結果から解離傾向は単一のモデルで生起するのではなく、いくつかの異なるメカニズムで生起するものが混在している可能性があることを示唆しているが、いずれにせよCEQで測定された空想傾向はその核をなすことを示している。しかし、一方で、Merckelbach, Rassin, & Muris (2000) は健常な大学生を対象者として解離傾向、Schizotypy、と空想傾向の関係を質問紙法により調査し、お互いに0.5 ($n = 152$) 以上の相関係数を示したが、Schizotypal Personality Scale得点とDESの関係はCEQを制御変数とした偏相関を

求めてもなお有意であつたと報告し、Schizotypyと解離傾向との関係は空想傾向の強さから生じているとは必ずしもいえないと報告している。

これらの研究が示すように、CEQは解離体験や幻覚性の体験を説明する場合重要な指標になることが示されている。

そこで、本研究ではCEQを翻訳し、日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的として調査、実験を行ったので報告する。

CEQ-Jの統計的検討

方法

対象者

一般教育科目の心理学を受講している2つの大学の大学生433人(男性46人、女性387人)、平均年齢19.16歳、標準偏差1.02歳(18歳~27歳)であつた。

質問紙

Merckelbachら(2001)が作成した25項目からなるCreative Experience Questionnaire (CEQ)の日本語訳を作成し用いた。以下CEQ-Jと呼ぶ。Merckelbachら(2001)の最終版では評定はYes-Noの2段階であつたが、今回は構造を精査するため「当てはまらない」を1、「あまり当てはまらない」を2、「やや当てはまる」を3、「当てはまる」を4とした4段階評定を求めた。

手続き

質問紙は一般教育心理学の授業の一環として配布しその場での評定を求めた。質問項目を全て完了するためにかかった時間は10分程度であつた。

結果と考察

1 記述統計

表1にCEQ-Jの記述統計を、図1に25項目

表1 CEQ - Jの記述統計

平均値	51.46
中央値	51.00
最頻値	44.00
標準偏差	10.19
歪度	0.22
歪度の標準誤差	0.12
尖度	- 0.22
尖度の標準誤差	0.23
最小値	25
最大値	85

の総合得点の度数分布表を示す。表2には項目別に平均値と標準偏差を示す。尖度と歪度の値はMerchelbachら(2001)らの結果と比較するとやや低く、彼らの結果と比較して形状の歪はより少なく、はっきりしていることがわかる。さらにSkewness ratioを算出してみると1.67と2より低いことからこの分布はほぼ正規分布に近いといえる。

性別ごとのCEQ-Jの25項目の総合得点の平均値を算出したところ、男性49.72(SD 10.82)、

女性51.82(SD 10.00)となり、t検定を行った結果、有意差はなかった。

2 信頼性と内的構造

表2に25項目の総和の間の相関係数と、その項目が除去された場合の係数を示す。25項目のCronbachの信頼性係数は $\alpha = 0.83$ であった。Merchelbachら(2001)は0.76と報告しているが、それよりも高い値である。また、総和と各項目の相関係数を見ても、彼らが削除すべきと考えた基準0.15を下回る項目はなく、全体的に彼らの結果より相関係数は高い傾向が見られる。表2に示すようにどの項目を除去しても係数は下がること、係数の値が0.8以上あることを考え合わせると、この尺度は高い内的整合性を持つ考えられる。

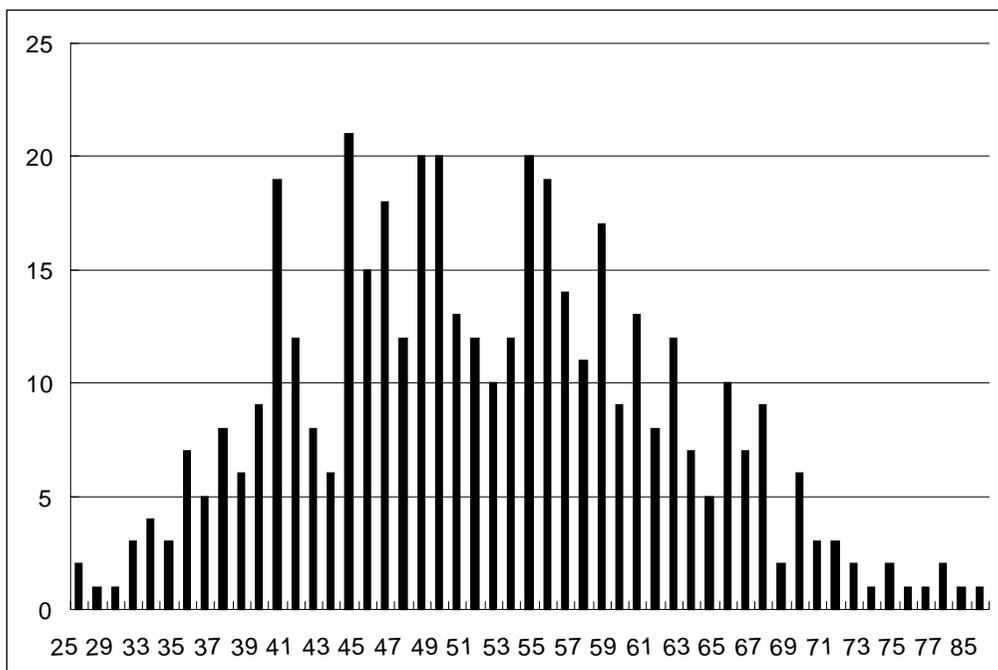


図1 CEQ - Jの総得点の分布 縦軸は対象者数、横軸はCEQ - J(25項目)の総得点を示す。

表2 CEQ-Jの因子分析の結果得られた因子負荷量と信頼性分析の結果
(網掛けは因子負荷量0.3以上の項目)

	平均値	標準偏差	1 異常な体験	2 空想の鮮やかさ	3 子どもの頃の体験	共通性	総和との相関	項目を削除したときの
24) 何かを歌ったり書いたりする時、自分以外の誰かや何かに自分が操られているという感覚をもつことがときどきある。	1.394	0.742	0.720	0.066	0.050	0.525	0.420	0.822
23) 時々、体外離脱体験(自分が身体から抜け出してしまうような体験)をしていたと感じることがある。	1.305	0.656	0.685	0.113	-0.160	0.507	0.337	0.825
25) 人生の中で、非常に強いやり方で自分に影響を与えた強烈な宗教体験がある。	1.211	0.615	0.582	0.049	-0.145	0.363	0.249	0.827
15) 時々、自分が誰か他の人であるかのようにふるまい、完全にその役になりきってしまうことがある。	1.648	0.854	0.517	0.314	0.133	0.384	0.481	0.819
20) 腐った食べ物を食べてしまったと想像すると、本当に吐き気をもよおしてしまうことがある。	1.938	0.923	0.485	0.069	0.195	0.278	0.357	0.824
21) 時々、未来に起こることを予知できるという感覚をもつことがある。	2.016	1.000	0.435	0.410	0.018	0.357	0.447	0.820
13) 空想したことを現実にあったことと混同することがしばしばある。	1.919	0.961	0.419	0.248	0.161	0.263	0.400	0.822
6) 子どもの頃、空想や白昼夢(デイドリーム)の世界に親しむことを身近な大人たち(両親、祖父母、兄弟)から勧められた。	1.319	0.620	0.394	0.045	0.281	0.237	0.336	0.825
22) 誰かある人のことを考えていて、そのすぐ後にその人が電話をかけてきたり現れたりするといった体験がしばしばある。	2.256	0.977	0.355	0.329	0.122	0.249	0.403	0.822
7) 子どもの頃、ひとりぼっちでさみしいとたびたび感じた。	2.056	0.977	0.337	0.045	0.236	0.171	0.236	0.829
19) 何か冷たいものを考えると、実際に寒くなることもある。	2.088	0.905	0.331	0.109	0.183	0.155	0.299	0.826
14) 退屈なときは空想をし始めるので、決して退屈することはない。	2.292	0.991	0.167	0.632	0.045	0.429	0.423	0.821
11) 自分の空想の多くは、現実のような鮮やかさ(リアリティ)をもっている。	2.523	0.875	0.016	0.615	0.240	0.436	0.436	0.821
12) 自分の空想の多くは、しばしばよくできた映画のように生き生きとしている。	2.428	0.936	0.175	0.614	0.271	0.481	0.531	0.817
9) 一日(日中)の半分以上を空想や白昼夢(デイドリーム)に浸って過ごしている。	1.796	0.906	0.321	0.593	0.090	0.463	0.522	0.817
16) 子どもの頃の思い出について、非常に鮮明で生き生きとした記憶がよみがえる。	2.472	0.939	-0.078	0.554	0.045	0.315	0.272	0.827
10) 友人や親類の多くは、私がこれほど豊かで詳細な空想をもっているということを知らない。	2.308	0.994	0.020	0.504	0.089	0.262	0.296	0.826

17) 私は3歳以前の出来事をいろいろと思い出すことができる。	1.501	0.761	0.132	0.432	- 0.080	0.210	0.268	0.827
8) 子どもの頃、楽器の演奏、ダンス、演技、あるいは絵を描くことに自分の時間の大部分を費やした。	2.648	1.075	0.197	0.357	0.147	0.188	0.348	0.824
2) 子どもの頃、小人や妖精や、ほかのおとぎ話に出てくるような登場人物が実在していると強く信じていた。	2.358	1.038	0.021	0.076	0.735	0.546	0.347	0.824
4) 子どもの頃、非常に容易に物語や映画の主人公に感情移入したり、一体感をもったりすることができた。	3.194	0.920	- 0.072	0.224	0.592	0.406	0.325	0.825
1) 子どもの頃、一緒に遊んだ人形やティペアやぬいぐるみの動物が実際に生きていると思っていた。	1.861	1.011	0.200	0.048	0.583	0.382	0.354	0.824
3) 子どもの頃、自分自身で友だちや動物のふりをして遊んでいた。	2.635	1.078	0.017	0.049	0.573	0.331	0.256	0.829
5) 子どもの頃、自分がほかの誰か（例えば、お姫様とか孤児とか）であるように感じる事がときどきあった。	2.308	0.968	0.299	0.195	0.549	0.428	0.485	0.818
18) テレビで暴力を見ると、それに入り込んでしまっただけで実際に動揺してしまう。	2.093	0.954	0.301	0.223	0.324	0.245	0.408	0.822
回転前の固有値			5.15	1.91	1.55			
回転前の分散の %			20.62	7.63	6.20			
回転後の固有値			3.15	3.00	2.46			
回転後の分散の %			12.59	12.02	9.83			

次に項目間の構造を明らかにするために主成分分析を行った。固有値1を基準として主成分を抽出したところ Merckelbachら（2001）より少ない7成分が得られ、説明率は合計で53.5%となった。彼らはスクリープロットを精査した結果、この質問紙は1因子構造であると考へ、因子分析は行っていない。今回の結果では、第1主成分の固有値、寄与率共に彼らの結果より高いため、成分に分解する必然性は彼らよりさらに低くなるが、項目間の関係をより詳しく検討するためにあえて主成分分析を実施した。固有値のスクリープロットと成分の解釈可能性を勘案し、3成分を抽出した。Varimax回転を施した結果得られた負荷量を表2に示す。3成分分解での寄与率は34.4%であり、やや低い値であることは否めない。

成分を命名するに当たり負荷量0.3以上がそ

の成分に属する基準とした。第1主成分に負荷量が高かった項目を見ると体外離脱体験や強い宗教体験など異常な体験の頻度を問う項目が多く見られた。そこで、異常な体験と名づける。第2主成分では空想の鮮やかさに関する項目が多く見られたことから、空想の鮮明性と名づける。第3主成分では、子どもの頃の体験を問う項目がまとまったので、子どもの頃の体験と呼ぶことにする。この主成分分析の結果は、CEQ-Jが比較的単純な構造を持っていることを示していると考えられる。

これらの分析からCEQ-Jは信頼性は高く比較的単純な内的構造を持っていること、もとなつた Merckelbachら（2001）の尺度と同等の特性を有していると考えられる。

CEQ と他の質問紙との関連

目的

次にCEQ-Jの妥当性を調べる目的で、空想傾向と関連を持つが比較的健康的な側面を測定するものと病理的な側面を測定していると考えられる二つの質問紙を同じ対象者に実施し、その関連性について検討する。

一つは、空想傾向と健康的な側面から関連すると思われる想像活動への関与を取りあげる。想像活動への関与を測定するImaginative Involvements Inventory (III) (笠井・井上, 1993) を使用する。この質問紙はHilgard (1979A, 1979B) の催眠感受性に関する事例的研究から、Davis, Dawson, & Seay (1978) が作成した項目に基づき笠井・井上 (1993) が作成した18項目からなる質問紙であり「まったくその通りである」を7点、「まったくそういうことはない」を1点として7段階評定が求められる。この質問紙は高い信頼性と妥当性を持つことが彼らによって示されている。

もう一方の病理的側面に関して解離性体験を取り上げる。解離性体験の程度を測定する解離性体験尺度 (DES - : 田辺・小川, 1992) である。この尺度はBerstein & Putnam (1986) によって作成されたDESを田辺・小川 (1992) が翻訳を行い標準化したものである。28項目からなり、その体験へ当てはまる程度を0%から10%刻みで100%まで11段階で評定を求めるものであり、信頼性と妥当性についても十分な吟味を経て作られている。DESとCEQの関連性についてはMerckelbach, Muris, Horselenberg, & Stougie (1999) によって $r = 0.55$ ($n = 42$) の有意な相関が確認されている。また、Muris, Merckelbach, & Peters (2003) は青年版の解離性尺度 (A-DES: Armstrong, Putnam, Carlson, Libero, & Smith, 1997) とCEQ、PTSD体験の関連性について重回帰分析を用いて検討し、A-DESとCEQに $r = 0.57$ ($n = 331$) と高い関連性を見出している。

方法

対象者

CEQ-Jの評定に参加した被験者のうち女性236人であった。

質問紙

笠井・井上 (1993) の作成したIIIと田辺・小川 (1992) の翻訳したDES- をCEQ-Jと同様の手順で実施した。ただし、IIIはCEQ-J実施の6ヶ月前、DESは5ヶ月前の時期に実施した。

結果と考察

表3にDESの28項目の総和、III18項目の総和と、CEQ-J25項目の総和と先に行われた主成分分析の結果得られた3つの主成分得点の間のPearsonの相関係数を示す。テストによって実施日が異なるため出席者数に出入りがあったので、対象者数は202人から196人と対応する質問紙によって異なる。

CEQ-Jの総合得点はIII、DESの両者とも、実施した時期に隔たりがあることも勘案すると、かなり高い関連性があることを示している。これは、過去の研究から予測される傾向と一致し、CEQ-Jの妥当性を示すものと考えられる。また、DESとIIIの間の相関も笠井・井上 (1993) の報告している0.31 とほぼ同様の結果であった。

CEQ-JはDESとIIIのどちらとも関連性が深く、IIIとDESの関連性はそれよりも低いことをあわせて考えると、CEQ-Jで測られる空想傾向はIIIで測られる健康な空想傾向とDESで測られ病理的な傾向の両者と深く関連することが推測される。

さらに、CEQ-Jの下位尺度得点とIII、DESの間の相関を見ると、IIIは全ての下位尺度と相関を示すが、最も高い相関は子どもころの体験と空想の鮮明性の2つの主成分得点で見られるのに対して、DESでは異常な体験との相関が高く、子どもころの体験とはやや相関が見られる程度、空想の鮮明性とは無相

表3 CEQ-JとIII・DESとの相関

	III	DES
DES	0.312***	
CEQ-J総合	0.553***	0.492***
CEQ 異常な体験	0.262***	0.439***
CEQ 空想の鮮明性	0.315***	0.126
CEQ 子どものころの体験	0.368***	0.275***

n = 202 ~ 196 ***p < .001

関である。これはCEQ-Jの空想の鮮明性と子どものころの体験に関する尺度の部分IIIに近い健康な空想傾向を測定するのに対して、異常な体験の下位尺度の部分DESに示されるような不健康な内的体験と関連することを示唆し、CEQ-Jの総合得点としてはIIIともDESとも高い相関を示すようになったことが推察される。笠井・井上(1993)は、IIIは物語を見聞きしたり空想するなどの体験について、没入の体験を意図して楽しむという側面を中心にしてそれに関与する程度を測定する尺度であるとみなされる、と述べているが、今回のCEQ-Jの下位尺度との相関もその結果を支持するものであると考えられる。

この結果はCEQ-Jはこれまで用いられてきたIIIやDESよりも幅広くより深い観点から空想傾向をとらえることのできる性質を持つことが示唆される。

CEQを翻訳し、大学生に調査を行ったところ、オリジナルとほぼ同等の構造と内の一貫性を持つ質問紙が作成できたことができたことが確認された。さらに、空想傾向と関係と考えられる想像活動への関与、解離傾向とも相関を示すことから、この翻訳版は妥当性も有することが示されたと考えられる。さらに、CEQは空想傾向における、健康な内的体験と不健康な内的体験の両者をあわせて測定していることが明らかにされた。

今後、空想傾向に関連すると考えられる諸現象の研究にその利用が期待される。

CEQの翻訳に当たっては作者である

Merckelbach氏の許諾を得た。快い対応に対して記して感謝する。

本研究の一部は、日本心理学会第68回大会にて発表した。

また、本研究を遂行するに当たり、平成15・16年度年度文教大学共同研究費の補助を得た。

REFERENCES

- Armstrong, J. G., Putnam, F. W., Carlson, E. B., Libero, D. Z., & Smith, S. R.(1997) Development & validation of a measure of adolescent dissociation: The adolescent Dissociative Experiences Scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **185**, 491-497.
- Berstein, E. M., & Putnum, F. W.(1986) Development, Reliability, & Validity of a Dissociation Scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.
- Bernstein, D. P. & Fink, L. A.(1998) *CTQ: Childhood Trauma Questionnaire: a retrospective self-report*. San Antonio T: Psychological Corporation.
- Broadbent, D. E., Cooper, P. F., Fitzgerald, P., & Parkes, L.R.(1982) The Cognitive Failures Questionnaire(CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, **21**, 1-16.
- Claridge, G., & Broks, P.(1984) Schizotypy and hemisphere function: . Theoretical consideration and the measurement of schizotypy. *Personality and Individual Differences*, **5**, 633-648.
- Crowne, D., & Marlow, D.(1964) *The approval motive*. Wiley: New York.
- Davis, S. D., Dawson, J. G., & Seay, B.(1978) Prediction of hypnotic susceptibility from imaginative involvement. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **20**, 194-198.
- Hilgard, J. R.(1979A) *Personality and Hypnosis: A study of imaginative involvement*. (2nd Ed.) Chicago: University of Chicago Press.
- Hilgard, J. R.(1979B) Imaginative and sensory-affective involvements in everyday life and in hypnosis. In E. Fromm & R. E. Sho(Eds.) *Hypnosis: Developments in research and new perspectives*(2nd Ed.). New York: Aldine. Pp. 483-517.
- Hyman, I. E., & Billings, F. J.(1998) Individual differences and creation of false memories. *Memory*, **6**, 1-20.
- 笠井 仁・井上忠典(1993) 想像活動への関与に関する研究：測定尺度の作成と妥当性の検討．*催眠*

- 学研究, **38**, 9-20.
- Launay, G., & Slade, P.(1981)The measurement of hallucinatory predisposition in male and female prisoners. *Personality and Individual Differences*, **2**, 221-234.
- Lynn, S. J., & Rhue, J. W.(1988)Fantasy proneness: Hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. *American Psychologist*, **43**, 35-44.
- Lynn, S. J., Rhue, J. W., & Green, J. P.(1988)Multiple personality and fantasy proneness: Is there an association or dissociation? *British Journal of Clinical Hypnosis*, **5**, 138-142.
- Merckelbach, H., Muris, P., Schmidt, H., Rassin, E., & Horselenberg, R.(1998)De creatieve ervaringen vragenlijst als maat voor “fantasy proneness” [The Creative Experience Questionnaire(CEQ) as a measure of fantasy proneness] *De Psycholoog*, **33**, 204-208.
- Merckelbach, H., Muris, P., & Rassin, E.(1999)Fantasy proneness and cognitive failures as correlates of dissociative experiences. *Personality and Individual Differences*, **26**, 961-967.
- Merckelbach, H., Rassin, E., & Muris, P.(2000)Dissociation, schizotypy, and fantasy proneness in undergraduate students. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **188**, 428-431.
- Merckelbach, H., Muris, P., Horselenberg, R. & Stougie, S.(2000)Dissociative experiences, response bias, and fantasy proneness in college students. *Personality and Individual Differences*, **28**, 49-58.
- Merckelbach, H. & Van de Ven, V.(2001)Another white christmas: fantasy proneness and reports of ‘hallucinatory experiences’ in undergraduate students. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **32**, 137-144.
- Merckelbach, H., Horselenberg, R. & Muris, P.(2001)The creative experience questionnaire(CEQ) a brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and Individual Differences*, **31**, 987-995.
- Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Schmidt, H. (2002)Modeling the connection between self-reported trauma and dissociation in a student sample. *Personality and Individual Differences*, **32**, 695-705.
- Muris, P., Merckelbach, H., & Peeters, E.(2003)The links between the adolescent dissociative experiences scale(A-DES), fantasy proneness and anxiety symptoms. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **191**, 18-24.
- Myers, S. A.(1983)The Wilson-Barber Inventory of Childhood Memories and Imaginings: children’s form and norms for 1337 children and adolescents. *Journal of Mental Imagery*, **7**, 83-94.
- Pekala, R. J., Angelini, F., & Kumar, V. K.(2001)The importance of fantasy-proneness in dissociation: a replication. *Contemporary Hypnosis*, **18**, 204-214.
- Sheehan, P. W.(1967)A shortened form of Betts’ questionnaire upon mental imagery. *Journal of Clinical Psychology*, **23**, 386-389.
- 田辺 肇・小川俊樹 (1992) 質問紙による解離性体験の測定 大学生を対象とした DES (dissociative experience scale) の検討 . 筑波大学心理学研究, **14**, 171-178.
- Van de Ven, V. & Merckelbach, H.(2003)The role of schizotypy, mental imagery, and fantasy proneness in hallucinatory reports of undergraduate students. *Personality and Individual Differences*, **35**, 889-896.
- Wilson, S. C., & Barber, T. X.(1981)Vivid fantasy and hallucinatory abilities in the life histories of excellent hypnotic subjects(“sombnablues”) preliminary report with female subjects, In E. Klinger, *Imagery: Vol. 2 concepts, results and applications*(pp. 133-149) New York: Plenum Press.
- Wilson, S. C., & Barber, T. X.(1983)Fantasy-prone personality: implications for understanding imagery, hypnosis and parapsychological phenomena. In A. A. Sheikh, *Imagery: current theory, research, and application* (PP. 340-387) New York: Wiley.